



宗祇初心抄  
文通二年 宗長宗碩両吟

伊地知文庫  
文庫20  
155





伊地知氏書冊



柳連方の枕を右にぬき  
と枕御為所及  
町をいふも白と  
少くはす  
とす  
又



金糸車石舟叶々下人教がらるる  
さふあつゆのよくとちんちりあつ  
ふふもたやとあうりしあふたふ安  
行とちりあつ

美に花うさぎの道に花にし  
坊にもあつる野中六日あつ  
うけうれいあふくあはあつはあつあつ  
とつとあつりあつ

行かましうめを  
に旅して

きこぬ花のいほけりし  
漕ぎあつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつるあつる



脚は又連言ありりりり

いほはてはたつたあまのまゝのまゝ  
ふもた浮世のちりたらしめて  
とつたあまのまゝのまゝのまゝ  
あまのまゝのまゝのまゝのまゝ  
うまのまゝのまゝのまゝのまゝ  
ふもたあまのまゝのまゝのまゝ  
うまのまゝのまゝのまゝのまゝ  
ふもたあまのまゝのまゝのまゝ

あまのまゝのまゝのまゝのまゝ  
うまのまゝのまゝのまゝのまゝ  
ふもたあまのまゝのまゝのまゝ  
うまのまゝのまゝのまゝのまゝ  
ふもたあまのまゝのまゝのまゝ  
うまのまゝのまゝのまゝのまゝ  
ふもたあまのまゝのまゝのまゝ  
うまのまゝのまゝのまゝのまゝ  
ふもたあまのまゝのまゝのまゝ  
うまのまゝのまゝのまゝのまゝ



又而連方所へは古事記引て竹山事  
不可嫌りしんは乃し各句股方之計く  
よはともしれ事さるゆは迄而是方少敷  
いふ小本粘りもこ又実と云句は廣新  
道と云くは是計二句を合て名所小あり  
ゆへに宗御宗通八所之處より一は是等  
少くは自余も又記す

一連方乃河原人など解さる事なり

家ハ能きらみらるるはたしむるは  
越よくはらねるも初んたり少  
少くありしははははははははははは  
一各句はははははははははははは  
たもははははははははははははははは  
是をそす所のたの解りはははははは  
くしありしはははははははははははは  
當はしはははははははははははははは







しんふ又二つにたつるもつらうくは  
小つこしひしあせりしりし  
乃事と能くゆらゆらあさりし  
后に及之百反の事ありし  
也方れありし事ありし

- 一 兼句同意の事
- 一 連懐背の意の事
- 一 依人の都合成る意の事

- 一 急<sup>非カ</sup>悲切と連歌の事
- 一 依連の考方以て成る事
- 一 人よりしるし合意の事
- 一 別る詞務の事
- 一 若くは詞と連歌

下均等也

此は隆正内二ヶ集年一ヶ集也







そなたの影の庵やうららかに  
とけしきも冬こりうらぬの底に  
折角の世直しもいふことせむは  
あつたうらぬのこころの事とあ  
るこゝろの影のまじり世直し  
あつたうらむ

白妙の行方海よりしるはく

こゝろ又ふりし国をうらむ

そなたよとぬらふはなを

とけしきも世直しもいふことせむは  
あつたうらぬのこころの事とあ  
るこゝろの影のまじり世直し  
あつたうらむ

一 述懐の由をいふとしつと音は

人よとけしきも世直しもいふことせむは  
あつたうらぬのこころの事とあ  
るこゝろの影のまじり世直し  
あつたうらむ







今この世を人の身はまじりて  
とるれは白きもの影なりは白き  
人内はせしむるは世なりし  
くまきわはけは場を伴ひて  
かみよくらくまじりて  
こころにまじりては鳴る  
こころは奥よりまじり  
こころはまじりては鳴る

うらまはあはれ  
一人まじりては白きもの影なりは白き  
くまきわはけは場を伴ひて  
かみよくらくまじりて  
こころにまじりては鳴る  
こころは奥よりまじり  
こころはまじりては鳴る  
一連をよまうては白きもの影なりは白き  
くまきわはけは場を伴ひて  
かみよくらくまじりて



あふらぬ女をば世にばりたり  
ふれそとてあはれはよとて田舎に  
ふれ白きとてあはれはよとて田舎に  
あはれはよとてあはれはよとて田舎に  
あはれはよとてあはれはよとて田舎に  
あはれはよとてあはれはよとて田舎に  
あはれはよとてあはれはよとて田舎に  
あはれはよとてあはれはよとて田舎に  
あはれはよとてあはれはよとて田舎に  
あはれはよとてあはれはよとて田舎に

あはれはよとてあはれはよとて田舎に  
あはれはよとてあはれはよとて田舎に  
あはれはよとてあはれはよとて田舎に  
あはれはよとてあはれはよとて田舎に  
あはれはよとてあはれはよとて田舎に  
あはれはよとてあはれはよとて田舎に  
あはれはよとてあはれはよとて田舎に  
あはれはよとてあはれはよとて田舎に  
あはれはよとてあはれはよとて田舎に  
あはれはよとてあはれはよとて田舎に

あはれはよとてあはれはよとて田舎に



別冊新撰傳抄の事

けり園のわきりに油をくわくわくと  
一 子格の色香は夜をなす事よまな  
向うとちたする詞林のあつたこと  
従ふくかしの色香にあらひうたも  
をししうまき色香とあそりうまき  
町をとりてふらん成とらん人のあ  
とらまに具好のふとらん物後  
さゆよこふりかしくつ成る程を宿衣

そよの建敷はみよたの色香もふと  
ゆよこふりかしくつあらん  
右に一帖くらり入る多あこれ所遊也  
おほくまひこけりよあつたあ  
入るる程よあつたあつたあ  
えいよこふりかしくつあらん  
うまき色香とあそりうまき  
葉の海のあつたあつたあ



おのづから多し事わたりて昔も也

文明の二河日 宗義判

何人

秋の物あわらさし語式 宗義  
若おすまうに宿も秋風 宗義  
小糸糸のひ珠の月よちるは  
床のたつとも被あつて  
物とのあつてのまはつて  
おまはつてのまはつて  
子うわらへてのまはつて  
さよ入日乃願れ御さ  
長、硯、長、  
疑々 硯 乾



ウ  
人々々々々のけりかきうて  
東よりくけききき川凡  
物り物りまは鳥の之別  
下河よりけぬあしきき  
竹らき門田の店れ物き  
まりのまうにき臨もをけ  
あきわのうけりあしき  
あくらら白き道程きけり  
梅きつるまきあけりしき

、 長、 硯、 長、 硯、

二  
うらまきけり人ゆりま風  
をうあらしきまきもる物て  
いばき都とあきくきゆ  
さあきとあきあきあき  
けりたにんきあしき  
あき殿に洞をききうて川  
ききあき世とあきの物き  
あきあき身れあきき  
あき、 宿の林よの月

、 長、 硯、 長、 硯、



かこつわい ありはらりてあかしく  
のこもれうしんをわたりてかく  
いふそしはあしあかしく夕  
八十歳うしんをわたりてかく  
わたりてかくわたりてかく  
わたりてかくわたりてかく  
わたりてかくわたりてかく  
わたりてかくわたりてかく

、 長、 硯、 長、 硯、

ニラ  
わたりてかくわたりてかく  
わたりてかくわたりてかく  
わたりてかくわたりてかく  
わたりてかくわたりてかく  
わたりてかくわたりてかく  
わたりてかくわたりてかく  
わたりてかくわたりてかく

、 長、 硯、 長、 硯



神さものうねもあつたわらわて  
 はりまのうねもあつたわらわて  
 波のきつづきあつたわらわて  
 ねまの風うつくしきうね  
 房よもあつたわらわて  
 ねまのうねもあつたわらわて  
 ちとねまのうねもあつたわらわて  
 あつたわらわて  
 灯はあつたわらわて

現、長、現、長、現

めりたどのうねもあつたわらわて  
 ねまのうねもあつたわらわて  
 ちとねまのうねもあつたわらわて  
 わらわて  
 めりたどのうねもあつたわらわて  
 ねまのうねもあつたわらわて  
 ちとねまのうねもあつたわらわて  
 わらわて  
 めりたどのうねもあつたわらわて  
 ねまのうねもあつたわらわて  
 ちとねまのうねもあつたわらわて  
 わらわて

現、長、現、長、現



こゝろやけりとも差乃小和袴  
 ちりちりしめせわしむ面紙  
 里をて着てははるけり世の言  
 来村とてたちうすくら舞  
 志やうしそ神のたともあなて  
 りんちあめりひそあひさ  
 るふよりきし舞し値のす書かじ  
 心あしんの山のしり空  
 かり衣たのすき世し枕しん

硯、長、硯、長、硯、長、

見んむやうもけり差のまのよ  
 懐こり御まひやし果がら  
 可りもめりを、世の元  
 草の奄すじりりたに波とん  
 けりそとやゆん若乃海ひ味  
 神も命とてし松板をいそ  
 ちりあめりあふり世に  
 けりちりあふり神も木板を  
 ちりちりあふり世のうゆ

硯、長、硯、長、硯、長、







石と木の子とすも夕網  
くちも屋すー言さらの油 硯

宗長 五十四

宗親 五十四

け百句と宗紙をへ  
千時八十二歳  
文亀二夫則誓 後河  
別の書ありーいん方ーんして  
京の枕はあーいん桃園ーいん所よ

寺ありうあふく菟角ねとありし七あり  
往々にてあのみあふりー院とありい  
いー者あふいありー宗親りあふ  
よありいはいー孫伝あふありー梅  
ありーいー







